

河 北 大 学 で

倉 田 稔

2005年に河北大学で、小林多喜二国際研究討会があった。これは、小樽商大卒業生の佐野力さんが組織したものであり、商大からは、私、荻野富士夫先生、および商大生4人が参加した。陳海帯さん、稲田亜里沙さん、稲田美弥さん、ゲン ショウテイさんである。日本人2人、中国留学生2人である。このうち日本人学生2人は、私が一般専門科目として「小林多喜二」というテーマで商大の学部で講義をもった時、その履修者から選んだ人々であった。

河北省（保定市）ゆき

2005年、11月

成田空港で、2万円を人民元に換えた。当時は1元が16余円である。4時間で北京空港へ着く。時差は1時間だ。河北大学で教えている松沢信祐先生、大学院生・陳君さんらが迎えにきた。日本からの参加者が北京空港に集まった。数年前に来たときと、様子が違っていた。新しい空港ができたのだろうか。それに空気が汚れていて、公害の臭いがする。北京周辺の環境汚染がひどいと思える。到着ロビー付近にスターバックスができており、学会の中国人案内者は、「入らない方がよいですよ、高いから」と言う。

北京の衛星都市へ向かう。途中、北京市内は近代的ビルが立ち並び、それに建設ラッシュでもあった。抗日博物館は、時間が遅くなり、入れないことになったが、特別に入れてくれることになった。だが、係員がいなかったので、結局入れなかった。でも役所的でないのが良かった。市の城壁の砲弾の跡など、そして町を見る。町はきれいに新しく整備されたものである。焼き芋が売られていた。日本のより黄色く、大きく、かなりおいしい。歴史的に有名な盧溝橋を見る。昔はこの橋は細かった。日中戦争が開始された場所である。日本軍が撃った銃弾のあとが保存されていて、説明もついていた。ただし、ある中国人が、共産党軍が挑発して銃を撃ったのです、と言っていた。真実のほどは私には分からない。近くに、観光用なのか、街区と建物がある。

保定市へ向かう。河北省の省都である。保定はあまり聞いたことがない。それもそのはずで、ここは軍事都市なので、あまり名前が出ないのだった。

バスの外は暗くなってきた。迎えに来てくれた中国人学生が自己紹介をする。そのうちの1人は陳君さんで、後に小樽商大に三ヶ月間留学することになる。かれこれ2時間ほどバスに乗り、保定市の河北大学へ着いた。ここは河北省で中心的な大学である。校舎に入るゲートには学生が番人をしている。後でわかったが、中国は物騒なのだそう。歓迎の横断幕が2つあった。歓迎ビラも貼られていた。大学に着いたのは夜8時過ぎであり、寮の前でパスポートを預けさせられた。ここの係の人もまた学生である。

夕食となった。給仕は出稼ぎ人だ。野菜スープに塩味がつけられていない。スープ以外の食事の味も素朴でなかなかよい味である。いわゆる中華料理ではなく、日常の食事だった。珍しい野

菜の料理がたくさんあって楽しい。味は濃くない。テーブルに白酒とビールが置いてあって、昼間から出ている。白酒は嘗めてみたら非常に強かった。最初の顔合わせなので、皆が自己紹介などをやる。

我々は寮に入った。部屋は入り口が1つで中が2つに分かれている。宿舎の係員は学生アルバイトである。いろいろなところで学生を使用しているのである。荻野さんと一緒になる。部屋の共用部にはトイレはあるが、風呂はなく、シャワーのみであって、それも9時から11時までしか湯が出ない。1人あたり一時間である。実際は、お湯は8時半から出たらしい。まだ暖房がないので、寒い。中国はエネルギー不足だと、私は見た。

12日（1日目）

爆竹が朝6時30分に鳴る。どこか学内の建物を壊す作業がされたという。その開始の合図らしい。朝早く起き、朝食をする。ビュフェ方式である。昼もビュフェ方式だ。朝食後そのまま会場へ向かう。大学構内を歩く。

河北大学も、随分大きな大学である。鉄柵ですべて覆われているので、普通人は用事がないと入れない。

近くの運動用屋外グラウンドで、朝早くから学生たちがバスケット・ボールをしていた。あとから分かったが、試合があるらしい。国際シンポジウムが、大学本部の建物で始まる。その場所は大変大きな高い建物で、20階くらいある近代的ビルディングである。学生数が多いから大きいのも当然である。研討会には、中国から15大学41名、日本から5大学3団体31名、韓国1名が参加とある。日本の1団体はHBC（北海道放送）である。計180名であった。

さらに、日本語を学ぶ学生、つまり日本語学科の学生がここに大勢参加した。日本語の練習のためであった。だが彼らは、報告の日本語がわからない、とのことだった。半分寝ていたと、後で聞いた。専門の話なので難しかったのだろう。会議では、来賓の挨拶が長く、中国らしい。さて昼食となる。3食ともいつも寮の同じ食堂でとる。私は会場の正面玄関でタバコを吸ったら怒られた。灰皿があるのに、変である。午後、私は報告し、質問1つに答えた。

一日目の会議が終わってから、皆で会場を出て、大学内の購買部で、ティッシュ、ノートを買う。初めてお金を使った。きわめて値段が安い。だがノートの素材は悪かった。物価は日本の10分の1だと見た。2万円は使い切れない予想で、大金持ちになった感じである。ここで簡単な日用品と学用品は買える。購買部の入り口にドア代わりに厚いビニールの帯がたれ下がっている。これは町のスーパーでもそうだった。

大学内の公園で、立って勉強している人がいた。「明日試験でもあるのか」と、中国の先生に聞いたら、「試験ではなく、毎日そうだ」とのことだった。

夜のこの公園は男女の逢引きでとても賑わうそうだ。後日、我々を案内した陳さんは、大学の前にあるアパートに気が付きましたかと、私に言う。私は気が付かなかったが、男女学生がこのアパートを借りるそうである。大学の寮は男性と女性とが別れているので、ここで一緒になるという。卒業してから、そのまま別れて散って行くそうだ。

参加者が、報道なのか分からないが、「アカハタ」記者にあって、少し話した。中国はエネルギー政策が大問題だそうだ。社会主義市場経済は矛盾しているのではないかと、質問したら、よくわからない返事が返ってきた。エンゲルスを誤読したとしか思えない答えであった。エネルギー

河 北 大 学 で

ギ一問題のため、中国政府は、地下資源のある国の独立は認めないのだと、私は思った。辺境国の独立なんぞは、血迷ったことと、中国当局は考えるのだろう。

夕食になる、夕食だけは時間があるので比較的のんびり食べられる。

食事が終わって、町のスーパーへ6人で買い物に行った。中国人留学生2人と日本人学生2人と荻野さんとだ。タバコを1ヶ8元で買う。帰国してから日本人にあげたら、カライと言う。スーパー・マーケットは非常に大きな建物で、地下から地上何階かまでである。何しろ人口が多いから大規模である。日本のデパートくらいの大きさである。中国人に言わせると小さい、とのことである。スーパーには何から何までである。荻野さんと1時間そこをみる。アメリカみたいだと、荻野さんは言う。このスーパーも、入り口は風よけのために、厚いビニールののれんがかかっている。我々の会議では、大学内で、映画「多喜二」が上映されるのだが、我々はスーパーへ来たので、見なかった。買い物が終わったので、そこで、6人でお茶をする。「ケンタッキー・フライド・チキン」で、であった。ただしコーヒーはまずかった。

タクシーで行き、そして帰った。料金がとても安い。初乗り5元くらいだ。中国人もタクシーで買い物に来るようだ。タクシーには運転席と助手席の間が鉄棒で仕切られていた。強盗よけである。売上代金を奪って逃げる強盗が出るそうだ。

13 (日)

国際シンポジウムの会議の第二日目である。私は第1分科会へ出る。第2分科会は10階で、そこへ行くエレベーターがどこにあるかが分からない、と参加者が言っていた。なにしろ大きい建物だから。独立プロダクションで日本人が組織している会社に来ていた。我々のこの会を、HBCも映画にとるそうだ。討議が終わり、全体会がなされた。総括では種々意見がフロアからでた。ゲン・ショーテイ（小樽商大留学生）さんが学生を代表して発言した。他の3人から押しつけられた、と言う。全員での記念撮影があり、これがまた時間がかかった。

昼食後、専用バスによる案内が始まる。一般観光、学術調査的観光とであった。後者は、日本軍に抵抗した場所へ行くグループである。だが農民一揆が起きていますとのことだった。農民反乱は報道がされないことになっているが、頻繁にあるとのことだ。そのためルートを少し変えたらしい。後日知ったのだが、地方政府が土地をとりあげて、これに対して農民が反乱する例が多いようだ。中国の土地は国有なので、農民は土地利用権があるだけだ。地方政府はこれを強制的に安く買い上げ、開発業者に高く売る。そしてマンションや商業施設を作らせる。これを開発というのだが、農民から見れば土地を奪われたわけであって、当然反乱が起きる。

私は一般観光に加わったのだが、こちらは人数が少ない。まず、大学新校舎を見た。我々の会場は本館らしいが、新校舎群はそこからかなり離れた所にあり、新しく大きい、それに沢山校舎がある。

町は道が広い。大きな公園があり、電気仕掛けの噴水が設備されている。ただし冬は動かさない。その公園には対日抵抗戦争の記念レリーフがある。軍服を着た人がいた。市心のデパートへ行く。このデパートはなかなか良い。茶を商う大きな商店も見た。途中、交通がとても激しい。車は大きなエンジン音を出して進む。それに自転車も一緒に車道を走る。常に交通事故を起こすそうだ。

直隸総督府を案内してもらった。大文化革命によってほとんどすべての歴史的建造物は破壊さ

れてしまったので、見物するところがなかった。1つだけ、この直隸総督府が残っていて、保定ではここくらいしか観光場所はないようだ。ここはしかし興味深かった。保定は、軍隊とその教練が中心の町であり、昔から北京を守る軍事都市だったのだ。だから余り観光場所がないし、その必要もなかった。そこで直隸総督府がここにある。保定は現在は大学都市にもなっている。

夕方にレストランへ行く。我々はロバの肉を食べに行くと言われたが、羊の肉だった。シャブシャブである。いつまで待ってもロバは出てこなかったもので、中国側が羊を間違えてロバと言ったのではないか。ただしロバの肉は売ってはいるそうだ。シャブシャブでは、鍋にすでにたれが入っている。1つは辛い唐辛子のたれで、もう1つはゴマだれだったろう。6人一緒のテーブルで食べる。中国の老文学教授に親しくなごやかに歓待されて、この会議が終わった。

我々は戻ってすぐ寝る。だが、わが学生さんたち4人は市内のマーケットへ、引率つきで行った。土産を買いたいとのことだった。

14日

朝早く起きて、15分で朝食をし、学生との交流会へ臨む。学生の1人稲田美弥さんが体調を崩す。昨夜マーケットで激辛ものを食べたそうで、その刺激で吐き気がするとかであった。

我々が訪れたのは商工学院の日本語科の1クラスだ。本館とは別の新校舎にある。30名くらいだ。もう1つの学部にも日本語科がある。懇談会が始まった。我々教員は語らず、4人の学生たちと河北大の学生たちだけが語る。勉強の様子や生活をお互い質問し合ったりした。初めの話題は、(2005年の)春の反日デモであった。だがこの学生達は友好の植樹をしようかと発案したのです。と言う。中国の授業は一方的だ、だから日本の授業について、知りたい、と言う。中国学生がなぜ日本語を学ぶか、が話された。中国学生が、日本の就職事情について知りたいと言う。稲田美弥さんが就職問題を卒論にしたというので、話す。大学生の男女交際については、大学内の夜の公園の交際が盛んだ、と言う。日本ではアパートがあるから違うでしょう、と言って大笑いになった。彼らは日本留学はあこがれだそうである。ゲンさんが、中国の大学に入れなかったので日本にきた、と発言した。お別れに、紙の切り抜きの土産を貰う。稲田さんの体調もよくなってきた。そのまま北京空港へ、バスで向かった。空港で、ゲンさんが彼女の親と会っていた。わざわざ故郷から空港まで会いに来たそうだ。そこで、我々は日本学生2人と昼食し、ショップで買い物をした。扇、栗、ナツメ、チョコなどである。昼食のお陰で、出発時に成田空港で換えた中国元は、ほとんど使うことができた。出発はまた一時間遅れた。成田に着き、中国留学生は翌日、渋谷・新宿に行くと言う。遊びであろう。大変結構である。